

Title	日本古代国家論究(Abstract_要旨)
Author(s)	上田, 正昭
Citation	Kyoto University (京都大学)
Issue Date	1969-05-23
URL	http://hdl.handle.net/2433/213138
Right	
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	none

【 5 】

氏 名	上 田 正 昭
	うえ だ まさ あき
学 位 の 種 類	文 学 博 士
学 位 記 番 号	論 文 博 第 41 号
学 位 授 与 の 日 付	昭 和 44 年 5 月 23 日
学 位 授 与 の 要 件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	日 本 古 代 国 家 論 究

論文調査委員 (主 査)
教 授 赤 松 俊 秀 教 授 小 葉 田 淳 教 授 有 光 教 一

論 文 内 容 の 要 旨

この論文は、著者が別に参考論文として提出した日本古代国家成立史の研究を公刊したあと、最近までのほぼ10年間に専門雑誌・講座等に掲載発表した論考23篇を集めて一部の著書としたものである。

収載の論考は発表の時期もそれぞれに異なり研究分野も古代の各部門にわたっているが、著書にまとめられるにあたって、(1) 古代国家の構造6篇、(2) 部民制の展開6篇、(3) 記紀以前5篇、(4) 古典文化の世界四篇と附論一篇、(5) 折口学と芸能史1篇の5部門に分けられている。その内容を逐一紹介することは紙幅の関係上省略し論考が明らかにしている重要事実を部門ごとにあげることにする。

第一部門は、大和朝廷の支配権の成立と展開から論を始め考察は律令制成立期の身分と階級にまで及んでいる。成立当初の大和朝廷支配の性格について著者はいわゆる英雄時代説の再検討を主張し律令制国家機構において完成する専制君主制の芳生えがこの段階に認められる、とし、その観点から王族将軍の性格、朝鮮派遣民族の動向が論じられている。律令制下の身分で著者が重視指摘するのは公民・公戸である。公民・公戸は従来の研究では公民と同一視されているが、著者によると、公民のうちにも封戸・品部・雑戸・公戸に所属することによって課役の負担内容が異なっている。著者独自の見解として注目される。

第二部門は、部民制の展開として、忌部の機能・祭官の成立など、古代では執政と同様に重要であった司祭機能の発展形態を明らかにし、久米歌・久米舞などの戦闘歌舞の伝流を荷なった久米部について検討を加え、旧辞を伝える語部の実態を中央地方にわたって広く詳しく究明する。語部については巡遊神人的性格を強調する見解が有力であったが、農業を行ないながら口誦詞章の伝承に当たっていたことが始めて明確にされた。建部の考察も令制以前の兵制究明として注目される。

第三部門と第四部門は、文献史学と国文学・神話・考古学との関連、古代日本と東アジアとの交渉に重点をおいて、古事記・日本書紀・萬葉集などの古典の成立、古墳時代文化相、神話論再検討・古代貴族の国際意識などを論ずる。歴史教育の課題として最近注目されている神話について、著者の立場は記紀編者

の作為と潤色を指摘するだけでなく、編者の削偽定実がいかなる立場からなされ後世にどのような影響を及ぼしたかを具体的に指摘する。

第五部門は、芸能史学に独自の分野を形成した折口信夫の業績に対する批判的評価である。

論文審査の結果の要旨

日本古代史研究は、律令制社会の研究が戦前に既にかかなりの成果をあげ、その基礎が固まっており、戦後の研究はその上にいよいよ堅実に発達しているのに対して、律令制以前の時代は、古事記・日本書紀などの基本史料の記事の信頼性に問題があり、そのために研究の発達が阻害渋滞したことは周知の事実である。著者は、3世紀の段階において専制君主権の芽ばえがあったとの見解のもとに、軍事、祭祀の古代国家二大機能が発生・発展した過程を綿密周到に追究している。著者の論が他と異なって精彩に富むのは、内外の神話・祭儀についての知識が豊かであって、従来の論に多く見られる公式的な階級論と考察の次元が異なるためであって、学界において高く評価されているのも当然といえよう。

なお問題が残っているものとして、地方部民と司祭者・国造など、生産と宗教に関するものがある。著者の今後の精進に期待する。

以上述べた理由により、この論文は文学博士の学位を受けるに値するものと認める。